

なると思われる周囲臓器からの圧迫のないこと、器質的変化の認められないことを見た。組織所見でも狭窄が幽門輪を超えて十二指腸にあることを認め肉眼的病理所見では、粘膜及び壁に器質的変化のないことを認めた(狭窄の内腔は約 5 mm で約 5 mm に亘つて存在、幽門輪より約 1 cm の所)。諸家の報告せるものに比してこの症例は狭窄が軽度のため通過障碍少く生命を保ちながら、一方胃拡張の原因となり前述の症状を起すに至つたものと思われる。胃<sup>3</sup>/<sub>5</sub> 切除ビロート第 2 法吻合を行い術後の経過は極めて良好である。

### 37. X線活動写真撮影法

窪田博吉, 井上昭彦

私共は日常容易に撮影出来る X線活動写真撮影法を研究しており、その現在の方法については第 16 回日本医学放射線学会で発表した。今回は穿刺胆嚢造影法で胆嚢が造影される過程を撮影したところ、壁のこまかくはやい運動とともに強く短い期間に現われる壁の部分的な運動を証明することが出来た。また、私共には非常にめづらしい結腸大運動の様相を捉えることが出来たので、この映画を供覧した。

### 38. 高圧拡大撮影法の研究

窪田博吉, 寺田俊郎

高圧拡大撮影が胸部 X線診断における一つの進歩であることは既に報告した。

今回は直径 1.0 mm 及び 0.4 mm の金網を使用し、種々の実験を行い小焦点高圧拡大撮影が普通撮影よりも利点があることを証明した。また、高圧撮影単独では肺結核よりも肺腫瘍の診断に役立つものと考えられる。

### 39. 縮小撮影法の研究

井上昭彦, 村山 勇

最近の X線診断は微細な変化を追求するようになったので勢い撮影枚数の増加を来している。しかしながら際限なくフィルムを使用することは国民経済からみて到底許されることではない。そこでわれわれは現行の間接撮影より大判で直接撮影よりは小型の縮小撮影を試みた。写真暗箱、テッサー (F. 4.5) を用いて間接用乳剤を使用し胸部の撮影に成功したが、レンズの改良によつて十分診断に耐える写真が得られることが解つたので研究を続行したい。

### 40. 最近経験した癌死 106 例について

大曾根俊士 (東京)

最近約 2 年 10 ヶ月間に、男 57 例・女 49 例の胃癌 69 例・子宮及び膣・外陰癌 10 例・乳癌及び食道癌各 6 例・腸癌及び肝癌各 4 例・口腔顔面癌 6 例・縦隔癌 1 例計 106 例の癌死亡例を経験した。胃癌 69 例は、切除再発死亡 13 例、診断的開腹術 11 例、胃腸吻合 3 例、手術不能 42 例であり、年齢は 50 才代が 43 例、60 才代 24 例、40 才代 21 例、70 才代 8 例、30 才代 7 例、80 才代 2 例、20 才代 1 例であつた。

生前諸検査(血色素量・赤血球数・白血球数・血沈・血清ポータロ値・血清総蛋白量・血清水素イオン濃度・血清蛋白分屑・尿蛋白・糖・ウロビリノーゲン・ミロン・ワイス・グロス・デビス反応等)成績は、当然不良のものが多数みられた。

死亡の季節では、夏 38 例・秋 24 例・春 23 例・冬 21 例で、月別では 7 月が 16 例、3, 6, 8, 9 月各 11 例宛、5 月 10 例、1 月 9 例、2, 11 月各 7 例宛、10 月 6 例、12 月 5 例、4 月 2 例であり、又昼間 28 例、夜間 23 例であつた。

発病乃至初療を受けてから死亡迄の期間については、106 例中 77 例は 10 ヶ月以内で、1 年以上生存 29 例中 26 例は再発例で再発迄の期間を含んでおり、子宮・膣・外陰癌再発 8 例、胃癌再発 6 例、乳癌再発 6 例、口腔顔面癌再発 5 例、腸癌再発 3 例であつた。

要するに、3 例のみが 1 年一寸生存し得たのみで、他は癌と気がつき或は治療を受けてから 1 年以内に死亡したもので、その早期発見及び治療法の向上の重要性を痛感した。

### 41. 河合外科に於ける過去 10 年間(1945-1954)

#### の悪性腫瘍の遠隔成績について

堀江 勲

河合外科に (1945-1954) 過去 10 年間に悪性腫瘍の診断の下に入院せる 744 名について入院病歴、退院後の生死を調査して 2, 3 の知見を得たのでここに報告する。

- 1) 疾患別に見ると胃癌が約半数を占め乳癌、直腸癌がこれに次いでいる。
- 2) 個々の疾患に於ける年齢分布は胃癌、肺癌、直腸癌では 50 才台最も多く乳癌は 40 才台最多で内外文献にほぼ一致している。
- 3) 切除率は乳癌 90% を最高とし平均 60% である。
- 4) 術後 5 年生存率で乳癌 37.5% 直腸癌、胃癌の順